

氏名（本籍）	オオシママユミ 大島真由美（栃木県）
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第178号
学位授与年月日	平成19年3月26日
学位論文等題目	〈作品〉景色シリーズ 〈論文〉不可侵の中心
論文等審査委員	
（主査）	東京芸術大学 助教授（美術学部） 齋藤典彦
（論文第1副査）	〃 〃（ 〃 ） 布施英利
（作品第1副査）	〃 教授（ 〃 ） 関出
（副査）	〃 助教授（ 〃 ） 植田一穂

（論文内容の要旨）

この論文は、論考編と作品編からなる。論考編では、〈不可侵の中心〉というテーマについて考察し、その周辺の制作動機について述べた。また、作品編には、論文テーマに関連のある作品を挙げた。

1章「屏風」では、一般的な屏風の要素とともに、私が感じ表現に利用した屏風の特徴を述べた。

屏風とは、その形の成立からして自由な設置、つまり鑑賞者の設置方法への介入を必要とする。ここに私は、鑑賞者との作為的でない間接的な交流と、描き終わったはずの作品の発展の可能性をみた。

2章「描画、表現」では、まず、私が必要に迫られて描いた形が、鑑賞者との深いコミュニケーションを可能にすることを述べた。

私は、日本絵画に見られる線と、隈取と呼ばれる線の内側に施された色のグラデーションは、現実の現象を超え主観を材料にし、〈有様〉として描いていると考えた。

3章「私の作品」で、2004年度からの作品についての解説を、古事記のヒルコ神や実体験を元に述べた。そして、私に身体的重要性を認識させる機会となった、鏡の中の自分の姿を見たとき、それが自分自身であると実感できなくなったという体験と、その経緯を追った。

4章「不可侵の中心—手触りのない身体—」で、改めて以下の考えを述べた。

〈不可侵の中心〉とは、私の想像上の中心点である。「在る」と対称の、仮想の「無い」世界で、身体によって現実と繋がっているようにふるまう。

「まとめ」では、屏風や表具の魅力、作品が作者だけで「完成」されるものではない、ということを書いた。

また、体験—作品に触れ、作品と関わること—は意識だけではできず、意識が用意した一つの門「ではない」別の場所からの、そのイメージの鑑賞者への流入をもたらす、という点について述べた。

私は、日本絵画の線や色の置き方は、主観や作者の体験をも含めたものの〈有様〉を表現する為だと考えた。そこで私は、屏風状の作品で私の世界の有様を形にしようとした。そこには〈不可侵の中心〉が含まれていた。

〈不可侵の中心〉は、私の中心にある手のつけられない虚無的空間で、その中には自分自身の分身であるヒルコ神に例えた赤子のような存在があった。それは、ネガティブな存在であると同時に、生命力とも呼べるような強い力でもあったために、私の世界の〈有様〉その物に強く影響を与え続けた。

また、日本絵画は個人的体験と思える〈有様〉をより全体的に伝える形態を持っていると私は考える。屏風もそのひとつだが、他の、掛軸、巻物もその機能をもっていると思う。

屏風は空間演出に秀で、掛軸は、屏風には無い、時と場所に合わせた容易な掛け替えができる。さらに巻物では時間の表現と巻物を繰るという行為によって、濃密な体験の共有が可能だ。表装は、現在私が身をおいている状況の中で、これからも描いてゆく作品テーマ、意識を超えた〈不可侵の中心〉を、最も確実に現実へ投影する手段であると信じる。